

【第42回唯物論研究協会研究大会シンポジウム「地方は何を奪われてきたのか—地方からの新しい政治のために—」報告】

## 地域的な議論の場の回復という視点にみる新しい政治の可能性

—原子力の問題とリニア新幹線建設問題を事例として—

澤 佳 成 SAWA, Yoshinari

### はじめに

山本公德氏は、本研究協会第42回研究大会シンポジウム(2019年10月26日)において、戦後日本の中央地方関係を規定する区分として、1990年代を境に、その前を「開発主義時代」、その後を「新自由主義時代」と提起された。原子力問題に着目すると、地方は、「開発主義時代」の時代、中央に利益をもたらす地として周辺化されてきたといえる。

原子力政策において、地方を周辺化しようとする方向性は「新全国総合開発計画」(1969年閣議決定)のなかでも記されていた<sup>1</sup>。そうした方針のもと、国策としての原子力政策が遂行されてきた結果、福島第一原発事故は発生した。同事故は、多くの人びとが故郷を喪失した福島(地方)と、オリンピック招致や改元などのブームでそうした事故の記憶が薄れている首都圏(中央)との間に、故・船橋晴俊氏の指摘する「受益圏」と「受苦圏」との関係があるという現実を顕在化させた<sup>2</sup>。

ときは山本氏の提起する「新自由主義時代」に移り、政策的には地方が切り捨てられ、都市への富の集中が標榜されている。そのなかの花形政策

であるリニア新幹線の開発は、新たに地方を受苦圏化する可能性をもつものだといえるだろう。

地方は何を奪われてきたのか。いろいろなものを奪われてきた地方から、新しい政治は立ち上がるのか。この問いについて探求するため、本稿では、開発主義時代の地方受苦圏化の事例として原子力政策を、新自由主義時代の地方受苦圏化の事例としてリニア新幹線の開発問題を事例として考察を進める。具体的な地域として、原子力政策についてはフルMOX燃料を使用する原子力発電所が建設途上の青森県大間町、リニア新幹線の開発問題については南アルプスの麓に位置する長野県大鹿村を中心に紹介しつつ考察を進める。

はじめに、両地域の一農家の視点から、原子力政策とリニア新幹線の開発から地方にどのような受難がもたらされているのか分析する(1節)。次に、その分析をもとに、地方から奪われてきたものは何かを考察する(2節)。さらに、地方が奪われた主たるものとして議論する場を取り上げ、それが奪われた要因について考察する(3節)。そして最後に、では議論空間を地方から立ち上げてゆくことは可能なのか、それに付随して必要な条件

<sup>1</sup> 「新全国総合開発計画」(昭和44年5月30日閣議決定)では、たとえば「全文」「2新しい社会への対応」において「国土開発の面では、レーザー利用技術の開発等による情報システムの変革、超高速大容量の輸送手段の開発等による輸送革命、原子力技術の進歩、新材料の出現等による生産形態の変革、海水の淡水化技術の開発による水利用の変革、住宅建設、都市開発等の技術進歩による環境の変化などが進展する」であろうから「このような技術革新を、わが国の国土、環境などの諸条件に適応しつつ展開して行く」と記されている。「第一部 国土総合開発の基本計画」「第4 計画の主要課題」では、「技術革新の進展は、エレクトロニクス、原子力等の分野において、新産業を發展させよう」、「原子力開発の進展に伴い、一次エネルギー供給

に占める原子力の比率は、約10%に達するから「このようなエネルギー需要の増大に対応して、大規模なエネルギー基地の整備を進める」と記されている。そして「第二部 地方別総合開発の基本構想」「第3 東北地方開発の基本構想」において、「小川原工業港の建設等の総合的な産業基盤の整備により、陸奥湾、小川原湖周辺ならびに八戸、久慈一帯に巨大臨海コンビナートの形成を図る」と記されている。

<sup>2</sup> 「公害問題の文脈では、受益圏とは、一定の事業や施設や意思決定によってなんらかの受益を享受する人々や組織の総体であり、受苦圏とは、逆に、それらによって損害や苦痛を被る人びとの総体である。」(船橋2001:38)

は何かをまとめ、提起する（4節）。

## I 地方の「受苦圏」化——大間町と大鹿村

では、戦後前期の開発主義時代と後期の新自由主義時代をとおして地方が何を奪われてきたのか、考察してみたい。具体例には、原子力政策に翻弄されてきた大間町、リニア新幹線の開発に翻弄されつつある大鹿村、それぞれに地域的課題と対峙してきた一農家の視点を通じて問題の所在を明らかにしたい。

### (1) 大間原発の着工を遅らせた一農家

あまり人口に膾炙していないけれども、青森県大間町は、マグロ漁で有名な町であるが、同時に、原子力発電所が建設途中でもある。まず、建設に至るおおまかな流れを記しておきたい。

1976年4月、大間商工会が町議会に「原発立地の適否調査」を請願し採択された。この動きに危機感をもった大間地区労働組合協議会のメンバーを中心に、1976年、「大間原発反対共闘会議」が結成され、1980年代には賛成派・反対派住民の間で攻防が繰り返された。共闘会議のメンバーであった奥本征雄さんによると、1982年ころから毎晩のように2～3世帯を単位に一軒のお宅に集まってもらい、共闘会議の2～3名が原子炉の図を描いた模造紙を用い、原発の問題点を説明したあと、参加者皆で議論する仕方で学習会を展開していった。その結果、1985年に開催された大間・奥戸漁協の臨時総会では「大間原発委員会」の設置が否決された。このとき、共闘会議の名称は、誰もが参加しやすくなるようにと「大間原発を考える会」に変更される。しかし、大間原発の建設主体である電源開発株式会社（以降「電源開発」と表記）の巻き返しはすごく、電源開発の大間支社には常に100名ほどが駐在する体制で、反対派漁師の説得にあたっていったという。そうして迎えた、2年後の1987年。再び開催された臨時総会では、同委員会の設置が可決されてしまう。漁協の砦が崩れたことにより、反原発の闘いは、建設予定地においてやり取りされ始めた土地を少しでも多く取得し、

建設を阻止する方向へと移っていく。そこで1990年に「一坪地主の会」が結成される<sup>3</sup>（注3）。

こうした攻防が繰り返される中、故・熊谷あさ子さんは独自の動きをみせる。あさ子さんは大間の漁師宅に生まれ、半農半漁の生活を営んできた。あさ子さんの農地は、当初の計画では原子炉建屋の建設予定地上にあった。電源開発からしてみれば何としてでも手に入れなければならない土地である。ところが電源開発が幾度となく交渉を試みてもあさ子さんは首を縦に振らない。そうするうちに、カラオケが大好きだった歌友達が離れていき、あさ子さんは孤独を強いられるようになっていく<sup>4</sup>。それでもあさ子さんは土地を売ろうとはしなかった。2006年に逝去したあさ子さんの遺志を引き継いだ長女の小笠原厚子さんは、暖かい時期には農地内のログハウス（あさ子ハウス）で暮らし、農作物を育てている。

あさ子さんを突き動かしていたのは、いったい何だったのだろうか。

「海と畑と水があれば人間は生きていける。あさ子、土地は売るなよ。」（稲沢・三浦2014:106）

これは、あさ子さんの亡き父が娘に対し死の直前に伝えた言葉であり、同時に、あさ子さんが父から受け継いだ農家としての信条であった。「あさ子さんに理屈はなかった。『大間に原発はいらない。原発は海を汚す。きれいな海を孫子に残したい』という一念だけだった」（同上書、106頁）。あさ子さんは一農家として、生涯、この信念を貫き通したのである。

あさ子さんの信念からくる粘りに根負けした電源開発は、当初の計画を断念し、計画の見直しを迫られた。その結果、着工は2008年までずれこみ、2011年3月11日の東日本大震災と福島第一原発事故を受け、原子炉本体の工事はストップしたまま現在に至っている。

### (2) リニア新幹線の工事と対峙する一農家

長野県下伊那地方の東部に位置する大鹿村は、約1000人のうち3割ほどをIターン・Jターンの

<sup>3</sup> 以上、当時の大間町の動きについては澤（2018）や科研費中間報告集（2018）を参照。

<sup>4</sup> 2016年9月14日、小笠原厚子さんへのヒアリング内容より。

住民とその2世・3世が占めるという人口構成の村である。南アルプスの主峰である赤石岳の麓に位置し、数百年続くといわれる大鹿歌舞伎が毎年執り行われ、人気を博している。そんな村へ2009年末に1ターンし暮らし始めた谷口昇さんは、大阪府出身の兼業農家である。

谷口さんの住む釜沢地区は、赤石岳登山道沿いにある長野県側の最後の地区となっている。そこで、経営者の高齢化により閉館していた温泉宿を再開して登山客の宿泊場所にし、地域の活性化につながるプロジェクトを開始しようとしていた。宿を再開できれば、地域の山の幸を宿泊客にふるまうと同時に、地域の生産者にとっては収入にもなり、一石二鳥となる。しかし、地域での話し合いに入った途端、プロジェクトは暗礁に乗り上げた。リニア新幹線の問題が立ちはだかかってきたのである。

リニア新幹線の線路は、釜沢地区にある溪谷の両側の山の中腹を貫き、トンネルを架ける仕方で地上に出てくる予定となっている。しかし、溪谷に面する山の中腹からトンネルを掘り始めるのは困難を極めるため、釜沢地区の別の場所から掘削が始まった。だがそのトンネルは、本坑の予定線に至るための横穴に過ぎず、残土排出が主な用途となる。件の宿は、その残土排出用トンネルの入り口に位置していたため、残土の「仮置き場」として狙われ、今では建物が撤去された土地に残土がうず高く積まれている。仮置き場になったのは、宿の跡地だけではない。釜沢地区は山の中腹に広がっているため、基本的には畑作が中心である。赤石岳から流れてくる小渋川の沿岸まで下りていくと少しだけ田んぼがあり、そこが貴重な稲の収穫場所となっている。ところが、2019年7月現在、トンネルの入り口に近いそれらの田んぼも、半分ほどが数メートルの高さの残土で埋まり、残りの田んぼも収穫が終わったあと残土で埋め尽くされ

る予定となっている。

漁協による漁業権の放棄が必要な海と違い、丘の土地は土地所有者の一存で方向性が決まる。そのため、宿の元経営者も、田んぼの地主も、圧力に屈したか借地料に生活をかけたかの違いはあるけれども、地域の重要な土地と農地が、この6年ほどの間に、次々に仮置き場へと変貌していったのである。

それでも谷口さんは釜沢地区の自治会長として、事業者側と粘り強く交渉を重ねてきた。しかし、法令で3年と決められている残土の仮置きを、最終処分地が見つからないため一方的に10年に先延ばしされたりする約束の反故が多発していると谷口さんはいう<sup>5</sup>。「10年後、たとえ本当に残土を撤去してくれたとしても、私はそのときもう60歳なんです。きちんと稲が育つまで土づくりをしようとしたら、それからまた数年かかってしまうんですよ。どうしてくれるんですかって話ですよね」<sup>6</sup>。

## II 地方は何を奪われてきたのか——原発問題とリニア問題に共通する視点

熊谷あさ子さんと谷口昇さん。ふたりの農家が、それぞれ、原子力政策、リニア新幹線の早期開通という国策と対峙しながら、どのように行動されてきたのか紹介した。ここでは、お二人の生きざまから、地方は何を奪われてきたのか考えてみたいと思う。

### (1) 奪われた幸福追求権——多様な生き方の否定

1つ目に、自由民主主義社会であれば、人間の基本的権利としてだれもが享受しているはずの幸福追求権を奪われている可能性が高い<sup>7</sup>。

あさ子さんは、お昼は農作業、夜は友人とカラオケという幸せな日常を送る権利を奪われた。原発計画がなければ受けずに済んだであろう村八分の疎外感をも味わった。小笠原厚子さんによる

り。  
<sup>7</sup> 「自由の名に値する唯一の自由は、他人の幸福を奪ったり、幸福を求める他人の努力を妨害したりしないかぎりにおいて、自分自身の幸福を自分なりの方法で追及する自由である。」(ミル2012:36)

<sup>5</sup> 残土の処理の扱いは自治体の条例によって定められている。基本的には3年以内の撤去が条件になっている。

<sup>6</sup> 2019年9月17日、谷口昇さんへのヒアリング内容よ

と、それでも「母は一人で我慢して、娘の私にも原発と闘っていることを長いこと言わなかった」という<sup>8</sup>。

大阪で生まれ育った谷口さんは、幼少期、経済成長するにつれて、遊んでいた小川が暗渠化され、田んぼがマンションへと変わっていくのを目の当たりにし、強烈な違和感を持ったという。大人になってから世界を渡り歩く生活を経て、自分たちで食べるものは自給自足的につくり、生活に必要な資金は兼業により獲得するという生活スタイルを選択し、友人が移住していた大鹿村を気に入って自らも移り住んだ<sup>9</sup>。ところが、そうした生活を始めてから間もなく、リニア新幹線の工事によって、自給自足的な生活が成り立たなくなる危機を迎えたことになる。

あさ子さんも谷口さんも、自らが幸せだと感じる生き方が否定されたからこそ、国策を遂行する相手と対峙せざるを得なくなっていったのだといえる。

## (2) 住民による能動的な地域づくりの契機

2つ目に、住民による能動的な地域づくりの契機も奪われている可能性がある。

先述のとおり、谷口さんたち釜沢地区の有志は、休業していた宿を再興し、地域づくりに生かそうと考えていた。もしこのプロジェクトが実現していたら、かなり面白い実践例になっていたかもしれない。ところが、リニア新幹線の工事は、そうした可能性を奪ってしまった。

谷口さんの姿勢は、地域資源(地域にあるもの)を生かすという点で熊谷あさ子さんの姿勢とも共通している。共闘会議の奥本さんの話によると、反対する人たちの共通認識は、自然が豊かな大間を原発で壊してはならないという思いだったという。漁協の臨時総会で「大間原発委員会」の設置がいったんは否決されたのも、漁師たちが原発の危険性を学んだうえで、海によって生かされる町

を守ろうとしたからである。だが、のちの大間では、原発マネーという外発的な力によって町を活性化する方向が選択された。この点は、大間に先んじて原発建設が完了した東通村、核燃の建設された六ヶ所村、使用済み核燃料中間貯蔵施設の建設されたむつ市も同様である。

しかし、そうした選択の結果、現在、内発的な地域づくりの動きが阻害されかねない状況が生まれている。2016年9月12日、下北半島は日本ジオパーク委員会に下北ジオパークとして認定された。その嬉しいニュースの一報で、次に世界レベルでの承認を得ようとするとき、下北半島に散らばる原子力関連施設が影響するのではないかという心配の声もあがっているのである。

## (3) 議論の場

3つ目に、2点目とも関係するが、地域のことについて住民がたがいに議論する場を奪われていった可能性もぬぐえない。

釜沢地区は大鹿村のなかでも移住者の割合が高いほうで、新旧住民が一緒になって地域のことを議論する機運が醸成されていた。温泉宿の再興プロジェクトもその一環であった。しかし、リニア新幹線の工事が地域に分断をもたらす結果となった。説明会后、谷口さんは地区長として「相談ごとは必ず自治会を通してください。絶対に個別では行わないでください」とその都度事業者にお願ひしてきたという。しかしその約束は反故にされ、個別に土地の貸借契約が結ばれていった。そうになると、はじめのうちはある程度一致してことに当たってきた住民のあいだであっても、事業を容認する住民と反対する住民との間で意見が割れるようになっていく。こうして分断がもたらされたとき谷口さんは指摘する<sup>10</sup>。

大間の場合も、漁協で大間原発委員会の設置が承認されてからは、原発のおかしさについて議論できない雰囲気になっていった。たとえ自分が

<sup>8</sup> 2016年9月14日、小笠原厚子さんへのヒアリング内容より。

<sup>9</sup> 2019年9月17日、谷口昇さんへのヒアリング内容より。

<sup>10</sup> 同上。

反対であっても、原発関連の仕事をする家族や親族がいたら、表立って意見を表明しにくくなっていくからである。そうして、ほとんどの住民が原発について口をつむぐようになっていった。

その結果、2011年3月11日に発生し、おおくの住民がいまだに故郷を追われている福島第一原発事故を経てもなお、大間町では地域の未来に原発が必要なのか、それとも工事を中止すべきなのか、議論できる状況にはなっていない。勇気をもって「おかしい」と発言した人が、周囲との関係性からふたたび沈黙してしまったケースもある。大間の町は、賛否の両側面から住民が意見をぶつけあった熱気がかつてこの町にあったとは思えない雰囲気なのがある。

こう見てくると、大間の人びとは、開発主義の時代、国策としての原子力政策が遂行されるにつれて、意見表明の機会と場を次第に奪われていったのだといえるかもしれない。地方が見捨てられつつある新自由主義時代を象徴するリニア新幹線の開発において最先端の問題を抱える大鹿の人びともまた、巧妙な形で分断され、地域の未来について語らう場をうしないつつある<sup>11</sup>。

地域で自らの幸福を追求しながら生き、そのために必要であればよりよい地域づくりに向けて一緒に話し合う。大間、大鹿の人びとも、そうした日常の場が国策によって奪われてしまったのである。

### III 地方が議論の場を奪われることになった要因

ではなぜ、地方から人びとのこうした議論の場

が奪われる結果になったのだろうか。それは、紹介してきた事例に即して端的にいえば、開発主義国家の、そして新自由主義国家の遂行する政策が、国策民営という形をとって、地域住民の意向を軽視する仕方で行われてきたからにはほかならない、といえるだろう。しかし、人間が幸福を追求しようとするれば意見の自由な表明と議論は欠かせない<sup>12</sup>。そこでここでは、本稿の事例と思想とを突き合わせつつ、議論の場を奪われた理由について考えてみたい。

(1) 市民的公共性の発揮される生活世界が大間にあった!?

まず大間の事例からみていこう。先述のとおり、大間では、学習会を展開した漁師たちの意思により、いったんは大間原発委員会の設置が否決された。では、当時正組合員が400名、準組合員が300名余いた大所帯の大間漁協の漁師たちの間では、どのような仕方で行われていったのだろうか。

奥本さんによると、腕の立つボス的な漁師30名ほどを中心として、それぞれにひとつのグループがあったという<sup>13</sup>。奥本さんたちが原発の学習会を展開するとき、また漁協の総会に臨むにあたって対策を立てるときに力になってくれたのも、この30名余の腕の立つ漁師たちであった。この漁師たちが中心となって10余名のグループで議論し、原発の危なさについての共有認識をしていったのである。

この取り組みは、ハーバーマスが重要だと指摘する「市民的公共性」が「生活世界」におけるコミュニケーションを通じて発揮された例だといえる

<sup>11</sup> マリア・ミースは、マルクスのいう本源的蓄積が搾取される側（周辺化される側）の分断を伴うのだと次のように指摘する。「～前略～継続的本源的蓄積とは、つねに新たな形態をとる『分断支配』にとっての一般的論理的なメカニズムなのであり、それどころかむしろその『法則』なのである。～中略～本源的蓄積のメカニズムが搾取される者たち自身の間にも作用して、彼らの間に現実的、物質的な矛盾とヒエラルキーを産み出しているということ、このこともまた彼らの統一をきわめて強く脅かし、何度となくそれを挫折させてきたのである」（ミース 1995:50）。

<sup>12</sup> 「自分の意見に反駁・反証する自由を完全に認めてあげることこそ、自分の意見が、自分の行動の指針として正しいといえるための絶対的な条件なのである。全知全能でない人間は、これ以外のことから、自分が正しいといえる合理的な保障を得ることができない。」（ミル 2012:52）

<sup>13</sup> このグループがどのような経緯で成立していたのか、どういう決まりがあったのか調査を継続しているが、漁師の長老に伺っても記憶がないとのこと、まだ明確にはわかっていない。今後の課題としたい。

かもしれない。

齋藤純一氏の分かりやすい要約を引用しつつ検討しよう。

「市民的公共性は～中略～私的領域（市民社会）と公的領域（国家）との明確な分化を存立基盤とする点で『具現的公共性』から、そして私的領域内部に成立する市民社会独自の公共性であるという点で『ギリシア的公共性』から区別される。」（齋藤 1987:265）

大間の漁師たちが議論を交わす関係は、何らかの権威により担保された公共性ではなく、また、古代ギリシアのポリスでなされたような公的な場での議論でもなく、私的領域の内部で自由に議論を交わす関係性で成り立っていた。この意味で、漁師たちの議論の場は市民的公共性がはたらく生活世界だったとはいえないだろうか。議論の結果、原発は海にとって何も良いことはないという合意がなされ、その生活世界での公論による共同意志が、漁協という公的な場で示され、決定に影響を与えたといえるからである。

## (2) システムによる生活世界の内的植民地化

しかし、1985年の否決から日本原燃の巻き返しが始まった。当時、大間はマグロの周期的な不漁期にあたり（水口 2015）、反対していた漁師たちが日本原燃社員の懐柔に「落ち」ていった。そして87年の臨時総会で85年採決はひっくり返される。補償金が配布され始めると、丘の土地を守ってきた「大間原発に土地を売らない会」（1985年発足）の運動にも動揺が広がり、それをみかねて1990年に発足された「一坪地主の会」も3か所の土地しか確保できないという状況に陥った。そうして大間には、もはや原発建設の是非をみんなで議論する雰囲気はなくなっていた。

85年から87年の間にいったい何が起こったのか。少し長いが、奥本さんの言葉を紹介したい。

「～前略～一緒に学習会をやってきて、だんだん、放射能というのは怖いもんだというのは分かってくるからね、スリーマイルとかチェルノブイリとかそういう先入観が結構あ

ったんで、最初は原発ダメだね、温排水が流されるとこの海は多分ダメになるよという、そういった面ばかりを追及してきたように思うんですよ。アでも、それだけだとやっぱり、原子力発電所がいいのか悪いのかの話になっちゃって、で、それだとやっぱりどうしてもカネと権力、そういうのに絶対勝てないという状況が作り出されていくんですよね

カネは、最初は一人の人なんでしょけど、それがだんだん広まっていくことによって、いいもんだと、当時はまだ直接原発事故もない時期だったから。ああ、カネももらえる、視察と称して旅行で、ここで生まれ育った人が圧倒的だったから、初めて飛行機乗る、初めて新幹線乗るみたいな。～中略～

あとは、地元では本当にそこまでやるかっていうくらい、朝昼晩、雨あられ関係なく、仕事の手伝いとか、援農活動ならぬ営業活動っていうか、すごいもんだなあと思った。だから、ここに事務所が出来たときは常時100人くらいの職員が、365日、地元対策を、向こうにすれば、いろいろ改善策っていうんですか。

～中略～電源開発の職員が来ると～中略～とにかく話だけでも聞いてくださいってくるんだけど、ぜったい玄関の中に入れないで、私も何回かそういう場面に出くわしたことがあるんだけど、彼らもちゃんと覚えて、ぜったい玄関の中へ入らない。不法侵入だって言われると困るから。で、玄関のところに立って、必ず2人か3人のセットできますから、で、その時に、漁師の人たちも水かけて「帰れ！」塩をかけて「帰れ！」とやるのさ。

イそれを毎日のようにやられるわけ。雨の日でも風の日でも。そうするとやっぱりさすがに今度は、雨の日なんかはさ、「濡れるしてじゃあなかに入らないさ」とはじめてそこで許可が出るわけだ。そうしているうちに、ひとつふたつ会話が交わされて、そのうち「立って話すのもなんだから腰かけろ」と、今

度は腰かけて話して、会話が。ウそうしてそ  
この家の人が、やがてお茶を出してくる。お  
茶が出れば終わりさ。半年から、かかる人は  
1年くらいかかる。半年、1年かけてもお茶が  
出るまで毎日のようにやってくる。お茶が出  
ると終わりということ、この家は落ちた  
ということ。」(科研費中間報告集 2018:44-45)

下線部イ・ウからは、懐柔された漁師が電源開発社員の情に訴える熱意に負け、意見を変えていった様子が伺える。このやり取りにおいては、ハーバーマスのいう合理的コミュニケーションがなされた形跡はない。むしろ、下線部アからは、コミュニケーションによって得られていたはずの共同意志が、カネと権力によってひっくり返されていったという当時の状況が伺える。つまり、「行為調整が生活世界における言語をメディアとする相互行為からシステムにおける貨幣・権力という脱言語化したメディアによる機能的作用に転位する事態を指す」「生活世界の植民地化」(齋藤 1987、266)がおこったのである。

こうして、大間の漁師たちは、生活世界と関係性をうしない、沈黙を強いられていった<sup>14</sup>。

#### IV どうすればよいのか——「地方からの新しい政治」のために必要な諸視点

##### (1) 議論の場は再興できるか

では、こうした状況の中で、地方から新しい政治は立ち上がりうるのだろうか。はっきりいえば、それは筆者にもわからない。しかし、大間で生じている変化から、コミュニケーションが再度立ち上がる可能性についてなら言及できるかもしれない。

この点について考える際の重要な前提がある。それは、ある人の沈黙は必ずしもその人の賛成を

意味しないという点である。稲沢潤子氏の分析を引用しよう。

「原発について語ろうとしないのは、賛成だからではない。国と電力会社と大手建設会社の支配が完了したからである。土地も海もとられ、何百億円という金をかけて原発施設が建設されている以上、いまさら反対してもむだ、という気持ちももちろんある。それ以上に、反対すれば地域社会からはじきだされ、仕事もまわってこない、という差別と不利益を実際にこうむる。」(稲沢・三浦 2014:75-76)

そうすると、「賛成派はけしからん」とか「反対派は何をしているんだ」といった二項対立的な見方で外野から叫んでもあまり意味がないのがわかる。沈黙してきた人は、月日をかけて、容認せざるを得ない状況に追い込まれてきているからである。それでも、人びとのあいだに変化の兆しがみられるというのが重要な兆候なのだといえるかもしれない。大間では、2008年以降、毎年ロックフェス(大MAGROCK)が海の日で開催され、その前には大間原発建設反対するデモも催される。奥本さんによると、そのデモに対する大間の人たちの関わり方に変化が見られるという。以下は、奥本さんへのインタビューの該当部分である(科研費中間報告集 2018:50~51)。

奥本さん ~前略~我々町民の大半は、べつに補償金も何ももらってない。/ただ、そうはいつだって恩恵はあるでしょといわれれば、それはゼロではないのさ。学校ができたとか病院がつくられたとか、そういうことを原子力カマネーで実際にできてるわけだから。せば、直接、間接的でも、町民として恩恵があるというように言われれば、いや絶対ないとは言いきれないもんね。そうい

<sup>14</sup> ハーバーマスは「経済システムが、私的な家計の生活形式と消費者や被雇用者の生活態度とを自らの命令のもとに屈服させてゆくにつれて、消費志向の立場と所有の個人主義が、仕事や競争の動機にまで浸透してくる。コミュニケーション的な日常実践は、専門主義的・功利主義的な生活スタイルの方向に一面的に合理

化される」という(ハーバーマス 1987:316)。大間では2016年から海の神事が中止された。この出来事について「カネにしなければ動かないという個人主義になってしまったからではないか」という奥本さんの洞察はハーバーマスの指摘と通ずるものがある。

う状況はあるけども、でも、以前みたいな  
 そういうしがらみが少なくなってるから。  
 今年のおおまぐロックなんかでもね、私の  
 知らないうちに、大間の人も何人か参加し  
 てたんだよ。

学生 よそから来た人が中心で大間の人は少  
 なかったんですか？ 今まで。

奥本さん ああ、ほとんどいなかった。いま  
 までせいぜい3人。私と、佐藤亮一という  
 会の代表と、それと、小笠原厚子さん。ぐ  
 らいしかいなかった。

学生 あとは全部よそから？

奥本さん そうそうそう。全国から来てまし  
 たね。今年も来たけど。でも、最初は窓  
 からこう手を振ってたのが、いまは「がん  
 ばれー！」って外まで出てきて。

澤 おおまぐロックがはじまる前のデモで、  
 毎年町のみなさんの反応が変化しているん  
 ですね。

奥本さん そうそうそう。チラシを撒けば受  
 け取ってくれるようになったしね。「頑張っ  
 てね」っていう。だから、継続は力なりっ  
 てのはこのことだって(笑) ただね、そ  
 れをどういう形で、まとめられるのか、だ  
 からといって、じゃあ「来年一緒にデモに  
 参加しませんか？」っていえば「No」です  
 よ。よっぽど、もういいって覚悟を決めれ  
 ば別でしょうけども。まあ、そういう人も  
 出てきたっつうことだから。「いや～、奥本  
 さん、実は私今回参加したんだよ」って。  
 びっくりしたもんね。「大丈夫だか？」っ  
 て思わずこっちが。その人は「いや、大丈  
 夫だ」って。

澤 普段からお話している方ですか？

奥本さん いや、話したことない人。(一同：  
 へえ～～～!)～中略～

学生 でも希望ですね。なんか。

奥本さん そうですね。やっぱ希望ですよ。

たしかに状況は厳しいけれども、私は希望  
 につなげれるんじゃないかなと思ってます。

大間のこの変化から、本特集テーマの「地方か  
 らの新しい政治のために」何がいえるだろうか。  
 それは、報告者のように「受益圏」にいる人間が、  
 「受苦圏」の人たちの問題は自分にとっても無関  
 係ではないんだという、井上真氏のいう「関わり  
 主義」(井上2004)的なスタンスをとり、地域の人  
 びとが「声を上げてもいいんじゃない？」と思え  
 る雰囲気や少しでも醸成する実践が重要な意味を  
 もつのではないか、ということである<sup>15</sup>。

3・11 福島原発事故は、原発がひとたび事故を起  
 こせば受益圏だって他人ごとではないという現実  
 を顕在化した。リニア新幹線も、南アルプスの隆  
 起による構造的歪みの問題、電磁波の問題、大井  
 川を水源とする地域の問題など、いのちに直結す  
 る課題が浮き彫りになりつつあり、じつは受益圏  
 に暮らす人間にとっても他人ごとではないという  
 事実を、我々に突き付けている。

## (2) 議論における作法について

このとき、政策を推進しようとする立場の人た  
 ちとの、そして判断を迷っている人たちとの議論  
 における作法も重要になってくると思われる。政  
 治権力の中核で国策を推進する人たちを少しでも  
 説得できれば、風向きが変わる可能性も出てくる  
 からである。この点について考えるとき、示唆的  
 なのは、谷口さんが事業者と議論をする際の姿勢  
 である。少し長くなるけれども、インタビュー記  
 録を引用しつつ<sup>16</sup>、谷口さんが事業者と議論する際  
 に大切にしている信条を紹介しながら、学びうる  
 視点を抽出したい。

### ① ジャッジせずニュートラルにみる

谷口さんは、誰にとっても安全であるかどうか  
 というニュートラルな姿勢で相手と議論し、性急  
 なジャッジをくれないように心掛けているとい  
 う。

<sup>15</sup> 函館市民による裁判などもまた、そうした関わり主  
 義的な実践だと捉えることができるかもしれない。

<sup>16</sup> 2017年7月9日、谷口昇さんへのヒアリング内容よ  
 り。

～前略～ここに約 10 年前に越してきました、これからって所に、目の前に、その最たるリニアっていう巨大な、僕からしたら過去の価値観の遺物、亡霊がバァーって目の前に現れてきた。今までは、若いときは逃げてきました、海外に。でももう今、釜沢で暮らすっていう気持ちが出てきて、逃げれる状態じゃない。どうしようもないと思って、勢いが余りにもありすぎて。そこで、さっき話したこどものころからの思いがあって、世界中を歩いてここに辿り着いたのに、こういう過去の亡霊というか、歪んだ発展の世界からみたら、そのかなり象徴的なリニアってのがきて、この問題と直面することになって。そこで、「よし！」とここは腹をくくって、向き合ってやろうと思って、で、今、ここで5年間、自治会長も引き受けさせてもらって、いろいろ5年間ずっと JR の最前線のところと、そのずっと対話し続けています。なんていうんですかね、「ジャッジをしないようにしましょう」というのは、こころのなかで、自分のなかで決めています。

必ずやっぱ、ジャッジってのは良い悪いって二極に分けるわけじゃないですか、で、いって決めた部分はしっかりとみえてくるじゃないですか、で悪いって決めた部分ってのは、見えにくくなって、っていうか盲点になってくる、っていうことで、今僕の立場的には、こういうところで、ほんとそう巨大なそういう部分とむきあっているんですけど、でも、サポートしてくれる人っていうのは本当にいない、一人っていうときに、じゃあ何ができるか、っていう部分はそれは答えはなくて、ひたすらジャッジせずに向き合っていくっていう、そこしか今、現実的になかなか、って。でそのなかで“ニュートラル”っていう感覚は、自分でも、なんていうんですかね、羅針盤っていう感じで、自分でもって、“ニュートラル”な状態ってのが、わかんないすけ

ど、こうかな、こうかな、っていうのを自分のなかで模索しながら。で、そこでみえてきたもんってのは、やっぱ、より多くの人が本当に幸せっていうか、安心して安全に暮らしていくってことが、まあ、僕の中の“ニュートラル”がこう響く部分っていうか。さらに、多くの人って言った時に、多くの人のなかでもジャッジしてリニアは良い、悪いっていうそういうような対立っていうのも、もちろんあるんですけど、ただ、そうなったときに、こうすごい悩んだんですよね。こう、その間に挟まって。

## ②過去の価値観ではなく未来の視点から考える

そして、ニュートラルでいるために、過去の価値観でジャッジしようとせず、未来志向で考え、相手と議論し、疑問を投げかけるように努めているという。

でも、それは実は、ある時、これは、みんな過去の価値観に基づいてジャッジしているんだな、ってことに気づいて。で、じゃあ未来、ちょっと過去っていうことは、未来をちょっと見てみよう、って思って、未来を見たときに、自分がこういうところに暮らせたり、自分がこうやって生きてきた、ってのは本当、過去の人が未来への思いをつないできたというひとつの今、形なんですよ。で、そのだんだん、いま、こういう風にこう日本の自然とか社会とかっていうのが、だんだん住みにくいな、苦しいな、テンションが強まっているな、っていう風に感じるってのは、それは、みんな未来を潰して、で、過去にとらわれて、で、その小さな自分の捕らわれのために未来を潰してきたってことが、一つの反省として、まあ自分の反省も含めて。で、これは、でも、その潰してきた人たちってのは、過去の人たちの思いを頂いて、ここまで自分たちは存在できたっていう部分がある、と。じゃあ、この部分ってのは何だっていうと、未来の人た

ちへの思い、まだ生まれていない人たちのためかもしれないし、それはわからないけど、それは同じですよ、まだ生まれていなくても、生まれて存在していくと、同じ思いになっていくかな、ってのが想像できるっていうか。まあその思いに立って、こういう恐ろしい問題と向き合うと、不思議とこう力が湧いてくる。勇気が湧いてくる。そこを、なんていうか、こう、うーん、もっとこう共有したいな、と特に若い人たちと共有していきたい。それは一人でも多く、そういう思いの人が増えてきて、じゃあちょっと未来、っていう部分っていうのを、自分でできる範囲、どっちがこの過去の価値観にとらわれたことかな？ っていう感じを、こう、それをこう感じると、すごく委縮したテンションを感じると思うんですよ。でも、これは未来の人たちに有効だな、っていうイメージが湧いてくると、ふわーって、力が、元気が湧いてくる、勇気が出てくる。そこをひとつの、特殊な経験からの価値観なんですけど、これはちょっとひとつみなさんの耳に入れておいてもらって、こころの片隅においておいてもらったら、きっと、なんかの時に、役立つかな、とか思います。

### ③相手をマスで捉えずひとりの人間として捉える姿勢

さらに、ニュートラルであるため未来志向で考える際、たとえ事業者側の人であっても、一人ひとり違う人間で、一人ひとりに家族がいる、そういう自分と当たり前の存在として接し、思いを伝えるようにしているという。そうすると、不思議と話が通じることもあるという。この点は、水俣病患者で、自分ももしチッソ社員だったらと思うといたたまれなくなって原告を降りた緒方正人氏という「システム社会」のなかで<sup>17</sup>、花崎皋平氏の

いう立場の転化可能性をふまえつつ相手と接する姿勢だといえるかもしれない（花崎 2001）。

ご存知かもしれないですけど、昨日も JR 東海のリーニアの住民説明会ってのがありまして、で、その前日はここで、ここで釜沢地区対象の懇談会、が2日連続あって、もうちょっと頭がこうプワーって沸騰しそうになっていたんですけど。

～中略～やっぱその末端の人たち、っていうの、社員の人たち JR っていう一括りにすると、本当に見えなくなるんですよ。物事の本質が。僕は、そういう風にもみるってことが、やっぱもう偏って・人間偏ってって、“ニュートラル” から離れていく、その一つのサインかな、っていう風な感じをもっていて、で、その、こう来られたたたくさんの技術者とか JR の社員とか鹿島 JV とかそういう人たちって、そういう一人ひとりってのは、この人たち一人ひとりに家族がいて、この人たちに立場があって、っていう風なところを自分のなかでしっかりイメージして、こうで、自分のなかで出てきた意見を出していく、っていうことは、それは、相手にとっても、現場の一人ひとりにとっても、そこは響くかな、って。みんな、すごい葛藤があると思うんですよ。一部の人は完全に機械化されて、すごい上から、無謀な計画を「やれ」「やろー！」みたいな感じで言ってきた人たちって、完全に数字の世界で、機械的になってしまってる。でも、そこと末端の社員の人たち、一人ひとりとは全く違う。で、人として、こう接する。どんな人でも人として接する。同じ感じを、多かれ少なかれもっている、っていうのを前提に意見を話すと、相手にも響いてきて、すごい僕らの思いってのは、ここで僕たちはこの

<sup>17</sup> 「チッソとは何なんだ、私が闘っている相手は何なんだということがわからなくなって、狂って狂って考えていった先に気付いたのが巨大な『システム社会』でした。私がいっている『システム社会』というの

は、法律であり制度でもありますけれども、それ以上に、時代の価値観が構造的に組み込まれている、そういう世の中です。」（緒方 2001:48）

残されたこういう大事な自然を見守っていき  
たいという気持ちと、高齢者とか、っていう  
部分を守っていききたい、未来を守っていき  
たいっていうのを一生懸命訴え続けたら、末端  
の現場の人たちもそこは響いてくれて。相当、  
まあ本部の方と自分の立場、危うい部分も出  
てくるリスクも負いながら、掛け合ってくれ  
て、ここまでは出来ました、とか正直に話し  
合いできて、それは結果的には、どれだけ破  
壊、物理的に破壊されるかっていうことが、  
問題になりがちなんですけど、でも、そこで  
やっぱそういう人たちにも、こういう心っ  
ていうか、こういう気持ちが伝わったときに、  
それが未来に生きてくるかなっていうか、そ  
の思いだけで、あの、今、僕は個人的にはリ  
ニアと接しています。

みんなもいろいろと難しい問題、社会の問題  
とか、政治的な問題とか、就職の問題とか  
いろいろ直面、いろいろこれから結婚しても、  
好きな人とうまいこと結婚しても、それであ  
れこれハッピーエンドってことはないです  
から(笑い) ないですよ。そっから、また始  
まるんですよ、っていうそこを楽しめるよう  
になるっていう。難問を、難問は幾ら逃げた  
って、逃げられないですよ。それはもう必ず  
全員に違う形で執拗な難問が来るんですよ。

それを逃げるために、バァーってそこに誘  
惑に乗るってことは更に問題を難しくしてい  
く部分ってのはあると思うんですよ。それは  
僕はずっと逃げてきて、ここでやっと向き合  
えるようになって、向き合ってみて、それで  
やっとこの年で気づいたんですけど、そうい  
う風なことで、へばりついて、こんなとこ、  
どうやって住んでるんだらう、ってことで、  
何とか今も生きてます。

#### ④批判的公開性

こうしたニュートラルな姿勢で相手と議論する

よう心掛けている谷口さんは、なるべく主観的に  
ジャッジしないよう、法的にどうなのか、科学的  
にどうなのか、説明に論理的な矛盾はないかとい  
ったところから疑問に思ったことを説明会でも意  
見するようにしているという。そして、説明会后、  
ほかの住民とも議論して次に提起する質問を考え  
たり、次に示す自分たちの意見をまとめたりして  
いる。

ハーバーマスの話に戻ると、谷口さんのこうし  
た取り組みは、ハーバーマスが重視した「批判的  
公開性」に当たるとはいえないだろうか。コミュ  
ニケーションで妥当性をやり取りする際、どれだ  
け説得的に裏付けられた意見であるかが、相手に、  
周囲に受け入れられるかを決めていく。その意味  
で、経済システムが釜沢地区に浸潤し、分断が起  
きているため、すべての人の共通意志ではないけれ  
ども、説得的な合意事項を説明会という公的な  
場で事業者に示しているという点で、谷口さんた  
ちの集まりもまた生活世界のひとつだといえるか  
もしれない。

#### (3) 社会のしくみの変革

しかし、いくら地方に暮らす人びとが合理的コ  
ミュニケーションをとろうとしても、議論する際  
のルールを自らに課し律していても、個別の取り  
組みだけで地方の「受苦圏」化を回避するのは難  
しい。

「JR 東海は説明会で私を指名するとき、いつ  
も『反対派の』谷口さんというふうに『反対派』と  
いう言葉を名前の前に入れるんですよ。私として  
は心外なんですけど。」<sup>18</sup>

谷口さんのこの言葉は、いくら住民が批判に耐  
えうる論点を公開し議論しようとしても、投げか  
けられた球を受け止める気が相手になればコミュ  
ニケーションは成立しないという厳しい現実を  
物語る。しかし、ハーバーマスの議論に即してい  
えば、釜沢の住民が、抑圧を伴って浸潤してくる  
権力のあり方にたいする異議を全うできるかどう  
かが、市民的合理性を実現できるかどうかの正念

<sup>18</sup> 2019年9月17日、谷口昇さんへのヒアリング内容  
より。

場でもあるといえるかもしれない。

だが現状は厳しい。リニアの残土問題にも原発事故の汚染度の問題にも共通する「仮置き場」の問題は、システムが拡大し地方を周辺化していく過程において、受苦圏で起こる深刻な問題が、受益圏にとって取るに足らない問題であることを象徴している。端的にいえば、この関係のなかでは受益圏が受苦圏の苦しみを顧慮する必要はない。経済システムが拡大し、中央にとって周辺は利益をもたらす地としてのみ捉えられ、周辺部固有の文化や人びとの生がなかなか顧みられないという状況は、国内における中央と地方との関係でも、グローバル経済のなかでの「先進」国（中核）と「途上」国（周辺）との間の関係でも同様である。

「中核地域もはじめから中核だったのでなければ、強力な国家機構をもっていたのでもない。辺境もまた、はじめから国家機構がとくに脆弱だったのではない。『世界経済』が成立して分業が深まってゆく過程で、それぞれの地域がそれぞれの方向に押しやられたのである。～中略～『低開発』とは、『世界経済』の分業体制のなかで生み出されたものなのである。～中略～こうして、『世界経済』の辺境に位置付けられた地域は食糧や原・材料の生産への特化を強いられ、『低開発化』される。」（ウォーラーステイン 2006:XIV-XV）。

いくら意思を示してもそれが救い上げられる回路がなく、貨幣・権力というシステムの機能的作用が徹底するようになった地域では、人びとはその機能に合わせた生活を強いられ、多様な生き方は均一化されていく。新自由主義時代がこうした状況の人びとに強いるのなら、国内的にも国際的にも、中央と周辺との関係を改善し、対等な関係になるよう社会のしくみを変革していく必要があるだろう。

では、どうすればよいのか。その筋道を示すのは、報告者の能力を超えている。そこで、いくつかのヒントになりそうな視点を最後に提起し、本報告を終わりとしたい。

#### ①農の視点から

まずは、ふたたび農の視点に立ち戻って考えてみよう。

くりかえしになるけれども、国内に対等ではない中央—地方関係があるのは、国際的にも中核と周辺との関係をとらざるをえない経済システムを採用しているからだといえる。とくに食料自給率の低い日本は、新日米安保条約を結んで以来、工業製品を売ったカネで食糧を調達すればよいという考えに傾いている（田代1987）。そして、1971年の大豆ショック以来、ODAで海外の農地整備を支援するかわりに、生産された食糧を輸入する政策をとってきた。だが、その結果、開発された地域で小農が土地を追われるという事態も生じた。現在モザンビークで進んでいるプロサバンナ計画も、そうした事例のひとつである。

モザンビークの農家エステバンさんは、取材に対し次のように語っている。「土地を耕しながら、土地とともに暮らしたいですね。誰かに『作ったものを買うからこれを作れ』といわれるような生活は嫌ですね。自分の意志で作りたいものを作りながら、ここで家族と一緒に農業をしていきたいですね」<sup>19</sup>。経済合理性が基調の新自由主義的行政システムにおいては、不採算だと判断される国内の小農を軽視する政策が実施されている。一方、採算の取れる海外の大規模農地で私たちの食糧の多くが生産され、小農が土地を追われている。エステバンさんの受難と、熊谷さん、谷口さんの受難とは、帝国主義的な経済システムにより生活環境が破壊され「受苦圏」化されていく点で、根っここの部分が共通しているように思われる。

そうであるなら、食料自給率を上げ、私たちの生存により国内外の農家の暮らす地域が「受苦圏」化するのを防ぐため、まず、国内の農の再生を図らなければならないだろう。そうすれば、国内の農家の暮らす地方の「受苦圏」化も、あわせて回避できるだろう。ただし、大規模農業では、地域

<sup>19</sup> TBS『報道特集』特集「プロサバンナ計画、誰のため？」2013年6月4日放送。

における農とエネルギーの自給圏の確立といった地方の自立を阻害するため、やはり小規模農家の力が必要になってくる。このとき、小貫雅男・伊藤恵子両氏の提起する「菜園家族」構想<sup>20</sup>は注目に値する（小貫・伊藤 2013）<sup>21</sup>。

こう提起すると、いま日本に食糧を輸出している国の経済はどうなるのかという反論を受ける。それに対する明確な答えを筆者は持ち合わせていない。ただ、経済システムを転換するためには、経済合理性の観点をいったん離れ、どんな地域の人びとでも食糧主権をもち、地域資源の自主管理権をもつという国際法でも基本的な考え方の視点から、方策を考える必要があるだろう。このとき、たとえばスペインの「社会的連帯経済」の取り組み（工藤 2016）等は参考になると思われる。

②そのほかに考えられる条件

最後に、農以外にも、地方の「受苦圏」化を回避するための社会変革にとって重要だと思われる視点をあげておきたい。

第 1 に、大 MAGROCK が象徴的だけれども、対抗的な文化を育むという視点は重要だと考える。

第 2 に、地域資源を生かしたツアーの取り組みや、特産品の生産と発信など、原発やリニアに代わる内発的な経済のあり方を模索する取り組みも注目される<sup>22</sup>。

第 3 に、行政のなかに住民参画の制度を作っていくことも必要だと考えられる。たとえばリニア問題に関していえば、阿智村が社会環境アセスメントの結果、残土の受け入れを決定したのは注目に値する。

第 4 に、受益圏の人びとが受苦圏とのつながりを捉えられるようにするには、地域学習、メディアリテラシー教育などの教育実践が重要になってこよう。

以上、原子力の問題とリニア新幹線の問題という具体的な事例に焦点を当て、そこに関わる地域の人々の考え方と思想との往還により、地方から新たな政治は立ち上がりうるのか、考察してきた。はなはだ不十分な考察ではあるけれども、今後、この点について議論される際の一助となるよう願いつつ、本稿を終わりとしたい。

参考文献：

阿智村・愛知大学「阿智村社会環境アセスメント委員会報告書（概要版）」平成 28 年 2 月  
 稲沢潤子・三浦協子『大間・新原発を止めろ——核燃サイクルのための専用炉』大月書店、2014  
 井上真『コモンズの思想を求めて——カリマンタンの森で考える』岩波書店、2004  
 緒方正人『チッソは私であった』葦書房、2000  
 小貫雅男・伊藤恵子『グローバル市場原理に抗する静かなるレボリューション——自然循環型共生社会への道』御茶の水書房、2013  
 工藤律子『ルポ 雇用なしで生きる——スペイン発「もうひとつの生き方」への挑戦』岩波書店、2016  
 齋藤純一「政治的公共性の再生をめぐる——アレントとハーバーマス」藤原保信・三島憲一・木前利秋編著『ハーバーマスと現代』第 10 章、新評論、1987  
 澤佳成「地域における民主的対話の基盤に関する探求——反原発運動者による反省の論理と倫理に着目し

<sup>20</sup> 「人間を支え、人間を育む基礎的『地域』の内実の根本的改革なしには、経済の変革も、政治の変革も、教育・文化の変革も、徒労に終わらざるを得ない。経済の源泉は、まぎれもなく草の根の『人間』であり、『家族』であり、『地域』である。そして民主主義の問題は、究極において人格の変革の問題であり、人格を育むものは、人間の生産と暮らしの場である『家族』と『地域』である。したがって、この『家族』と『地域』を時間がかかってもどう建て直し、どう熟成させていくかにすべてがかかっていると言わなければならない。」（小貫・伊藤 2013:240）

<sup>21</sup> 関連して、TBS の『サンデーモーニング』（2019 年

10 月 20 日放送）において、寺島実郎氏が、今回の洪水被害は食と農の問題だと言ったのは興味深い。耕作放棄地が広がって天然のダムである田んぼの機能が落ちたことが原因なのであって、今後ダムをどんどん作ればよいという問題ではない、食料自給率が低いまま外国から食料を調達する社会のままでいいのか、食と農の観点から日本の未来を考える時が来ているというのである。傾聴に値する。

<sup>22</sup> 長野県伊那郡でも、青森県下北地域でも、地域の方がたによるさまざまな取り組みがなされている。微力ながら拙研究室も毎年大学祭で模擬店に出店し、東通村の産品を販売している。

- て』『民主教育研究所年報 2017 (第 18 号)』民主教育研究所、2018
- 社会文化学会『社会文化研究 21 抵抗の文化は可能か?』晃洋書房、2019
- 花崎皋平『アイデンティティと共生の哲学』平凡社ライブラリー、2001
- 船橋晴俊「環境問題の社会学的研究」飯島伸子・鳥越皓之・長谷川公一・船橋晴俊編『講座環境社会学第 1 巻』第 2 章、有斐閣、2001
- 本郷豊・細野昭雄『ブラジルの不毛の台地「セラード」開発の奇跡』ダイヤモンド社、2012
- 水口憲哉『原発に置かされる海——温排水と漁業、そして海の生き物たち』南方新社、2015
- モザンビーク開発を考える市民の会『ProSAVANA 市民社会報告 2013—現地調査に基づく提言』2014
- 「地域的公共圏の意義についての思想的探求——合意形成の可能性を軸に」(課題番号 16K16235) 平成 28～31 年度科学研究費補助金(若手 B) 研究代表者：澤佳成、研究成果中間報告集、2018
- ハーバーマス、J、丸山高司ほか訳『コミュニケーション的行為の理論(下)』未来社、1987
- ミース、M、C.V.ヴェールホフ、V.B=トムゼン、古田睦美・善本裕子訳『世界システムと女性』藤原書店、1995
- ミル、J.S、斎藤悦則訳『自由論』光文社古典新訳文庫、2012
- ウォーラーステイン、I、川北稔訳『近代世界システム I——農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立』岩波書店、2006